トキメキファンタジー
ラ☆ファル☆

シャオという女性

　とある日の龍京。そこに四人の冒険者がやってきた。
「ここが龍京ね。はぁ……やっと着いたわ」
　マジシャンの女の子――ユイはため息をついた。
「悪かったって……いい加減機嫌直せよ。ユイ」
　シールダーの少年――ダイゴは地図を片手に謝ってた。
「あんたが道を間違えたせいで到着するのがどんなに遅くなったと思ってるのよ！」
　ダイゴに向かって怒鳴りちらすユイ。ユイの怒りの原因は自ら地図を持ち、道案内を買って出たダイゴが道を間違え、龍京に着くのが遅くなったせいだからであった。
「そのぐらいにして上げなよユイ」
　そんなやり取りをしている二人の後ろに居たファイターの少年――ユウキはやんわりと止めに入る。
「すぅ……すぅ……」
　そして、ユウキにおぶられている少女――アカリは気持ちよさそうに寝ていた。手にはエンジニアの武器でもあるカバン。寝ているのにしっかりとカバンだけは持っている。
「ユウキは甘いのよ！　こいつのせいでみんなに迷惑がかかっているのよ！？」
　ユイは自分の武器でもある杖でダイゴを指す。
「だから悪か――」
「あんたは黙ってなさい！」
「すみません……」
「あははは……」
　しゅんとするダイゴを見て苦笑するユウキ。
「とりあえずシャオって人を探そうよ」
「そうね。元々それが目的だったわけだしね」
　ユウキ達が龍京に訪れたのは伝説的な冒険家イリス一行の一人であるシャオという人に会うためだった。冒険者になった当初、ジエンディア大陸に来る時に見た巨大な怪物と一人の少女が戦っている映像、そして伝説の冒険者であるイリスの助けを聞いたのがこの旅のきっかけ。
　最初はユウキとダイゴの二人旅だったが、困っているところを助けてくれたユイと山林炭鉱で一人、迷子になっているところを助けてあげたアカリの四人になった。
　実力もある程度ついたところでベロスのロハンからイリス一行の一人であるナ・ムーウェンが一人で帰ってきて赤龍の巣に向かった事を聞き、四人で向かう事に。
　誤解したムーウェンから攻撃を受けるが、なんとか誤解を解き、イリスの事について聞くが教えてはもらえなかった。代わりに一行の一人だったシャオの事を教えてもらいこうして龍京までやってきたのだった。
「うみゅ……着いたの？」
「あ、アカリちゃんおはよう。下ろすよ？」
　ユウキは起きたアカリを背中から下ろす。

「ふぁ～……ありがと。ユウキお兄ちゃん」
「どういたしまして」
「よっし、アカリちゃんも起きた事だし早速行こうぜ！　お、あそこに女の子がいるな。あの子に聞いてみようぜ」
　ユウキ達がその子に近づくと向こう方のほうがこちらに気付き、こちらに向かって一礼する。
「こんにちは。冒険者さん」
「こんにちは。僕はユウキ」
「俺はダイゴだ」
「私はユイ。よろしく」
「私はアカリだよ！　よろしくね！」
「ミンメイはミンメイって言います。よろしくね」
「ミンメイちゃんだね。聞きたい事があるのだけど、シャオさんって人が何処にいるか分かるかな？」
「シャオおねーちゃんに用事？」
「そうなんだ。ちょっとお話したい事があって。案内してくれるかな？」
「うん。こっちだよ」
　ミンメイの案内で龍京の中を歩いていくと何処からか楽器の音色が聞こえてきた。
「これは……」
「シャオおねーちゃんの演奏だよ。すごいでしょ？」
　とてもゆっくりで綺麗な音色が聞こえてくる。
「なんか落ち着くねぇ～……」
「そうね」
　アカリとユイは、うっとりしながらその音色に聞き入っている。
「あれがシャオおねーちゃん」
　ミンメイが指さした先にはイスに座り、楽器を弾いている綺麗な女性。
「あれって三味線か？」
「……あんたねぇ」
　ダイゴの質問にユイは呆れ顔でダイゴを睨む。
「あれは二胡って言うのよ。覚えておきなさいバカ」
「あら？」
　そんなやりとりが聞こえたのか、シャオは演奏をやめ、こちらに視線を向ける。最初にミンメイを見たあとユウキ達をゆっくりと品定めするような視線で見回していく。
「……若い冒険者さん達ですね」
「あはは……。やっぱりそう思いますか」
　ユウキ、ユイ、ダイゴの三人は全員十六と同い年。アカリにいたってはまだ十三という年齢の低いパーティーになっている。
「でも、実力はあるようですね」

「当たり前よ。ここまで必死に努力してきたんだから」
　シャオは胸を張ったユイの言葉に微笑しつつ軽く一礼。
「急に失礼しました。改めましてようこそ龍京へ。ミンメイから聞いているとは思いますが、私はシャオと申します」
「僕はユウキです」
「俺はダイゴだぜ！」
「私はユイよ」
「私はアカリ！」
「それで私に何かようですか？」
「シャオおねーちゃんにお話があるんだって」
「私に……ですか？」
「あ、はい。伝説の冒険者イリスさんの事についてです」
　ユウキからイリスと言う言葉を聞いてシャオが警戒するような視線を向ける。
「……その質問が好奇心からのものならば私がお答えする事は何もありません」
「えっと、ナ・ムーウェンからあなたの事を聞いてあなたなら何か教えてくれるんじゃないかと教えてもらったんです」
　きつい言葉に困ったユウキだが、とりあえずここまでの経緯を話す事にした。それが良かったのか、ムーウェンの名を聞いたシャオは警戒するような視線をやめ、何かを懐かしむような顔をした。
「ムーウェンですか。ふふふ、懐かしいですね。けれど、残念ながら私は他の仲間やイリスが何処にいるかというのは知らないのです。力になれず申し訳ありません」
「そう、ですか」
「ユウキお兄ちゃんこれからどうするの？」
　シャオが知らないとなれば、イリスに関する手がかりが皆無という事になってしまう。これでは捜しようがない。
「あはは……。どうしよっか？」
「笑ってる場合じゃないわよ！」
「お、落ち着けよユイ。人がいっぱいいるところでそう怒鳴るなって」
　困り果てて苦笑するユウキにユイが怒鳴る。そして、それをダイゴが嗜めるといういつもとは逆の図が出来上がっていた。
「あの、話し合いのところ申し訳ないのですが、あなた達の実力を見込んで一つお願いがあります」
　そこで少し申し訳なさそうにシャオが会話に入ってくる。
「あ、はい。なんでしょうか」
「皆様は治癒の聖所という不思議な場所はご存知ですか？」
「それって山岳洞窟の奥にあったあの場所じゃないかしら？」
　ダイゴのせいで道に迷ったユウキ達だったがその途中でたまたま治癒の聖所を見つけていた。
「座ってるだけでなんだか元気がわいてくる場所だったよね！」

　道に迷い疲弊していた四人にはお誂えの場所だった。
「はい。あそこは瀕死の者すらも一瞬で完治させてしまうほどの力を持った場所ですから」
「その治癒の聖所がどうかしたんですか？」
「このような場所は神仙達が仙道という力をよういて作ったものなのです。そして仙道は、神仙達が脈々と受け継いできた大切な力。この力を悪用しようとするものがいるのです」
「神仙……？　仙道……？」
「あんたは黙ってなさい」
「すみません……」
　言ってる事が分からないと首を傾げるダイゴだったがユイの言葉にしょんぼりしながら黙り込んだ。
「もしかして僕達にお願いしたい事って……」
「察しがよくて助かります。その悪用する者名は『シェンウ』。エリアスの言葉で玄武と呼ばれる魔物です。シェンウは仙道の力を集め、己の欲望のために使おうとしているのです。私も剣術には多少心得があるのですが、すでにシェンウは一人では抵抗できないほど強くなっています。そこで、皆さんにそのシェンウを共に退治して欲しいのです」
「ミンメイからもお願いがあるの。シェンウのいる玄武洞にいる場所に向かう時にいるモンスター達も倒して欲しいの」
「……ユイ、どうする？」
　シャオの言葉を聞いてユウキはユイに話を振る。それを聞いてユイがため息をつく。
「このパーティーのリーダーはアンタでしょ。私達はそれに従うだけだから自分のやりたいようにやりなさいよ」
「そうだぜ。お前の選択に間違いはない！　俺はそう信じてるぜ！」
「私も！」
　みんなの力強い言葉を聞いてユウキは少し考えた後、頷きシャオへと向き直る。
「分かりました。シャオさんとミンメイちゃんのお願いお受けします」
「ありがとうございます。私は準備がありますので後から合流します。先にシャングリラへと向かってもらえますか？」
「シャングリラ？」
　聞いた事のない地名に首を傾げるユウキ。
「シェンウの隠れている玄武洞のある土地です」
「でも、僕達は道を知らない――」
「それなら俺が案内しましょう」
　そこに一人の青年がやってきた。
「話は聞きましたよ。俺はリューシン。良ければ俺がシャングリラまで案内しますよ」
「リューシン……。良いのですか？」
「シャオさん。俺にも何か手助けさせてください。このまま黙って見送るなんて出来ませんよ」
　リューシンの訴えにシャオは少し俯き考えた後、顔を上げる。
「分かりました。では道案内お願いします」

「任せてくださいよ！」
　その言葉が嬉しかったのかリューシンは力強く答えた。
「それじゃあ早速出発しようか。リューシンさん道案内お願いしますね」
「もちろん」
「腕が鳴るぜ！」
「せいぜい足手まといにならないように頑張りなさいよ」
「私も頑張る！」
　ユウキ達は早速シャングリラへと向かった。

　町を出たユウキ達はまずシャングリラへと続くアルカディアを通る事に。
「ここはアルカディア。モンスターが出るけど……キミ達の実力なら何も問題なさそうだね」
　リューシンは目の前の光景を見て言った。
「俺の盾の前に敵はないぜ！」
　数体の白九尾の攻撃を持っている盾で余裕で防ぐダイゴ。
「アイススピアー！」
　ユイの魔法でダメージを与え、
「疾風迅雷！」
　ユウキの両手剣による剣技がトドメを刺す。
「メカサモン！」
　そしてアカリのカバンから出てきた可愛いロボによるビーム攻撃で残ったモンスターを蹴散らす。見事な連携だった。
「どんなもんだ！」
「あんたは、防御してただけでしょ」
　ダイゴの言葉に透かさずツッコミを入れるユイ。
「ぐっ……、い、良いんだよ！　そのおかげでお前等も助かってるだろ！」
「あーはいはい。そうねー」
「ユイてめぇ……」
「何よ？」
　お互いににらみ合う。今にも殴り合いの喧嘩が始まりそうな雰囲気だった。
「……こんなんでよくここまで一緒にいられたね」
　二人のやりとりを見て苦笑するリューシン。
「まぁ、こんなんですけど、二人とも仲は良いですから」
　ユウキはすぐに終わるだろうと二人のやりとりを見守っていた。
「あわわ、二人とも落ち着いてよ～」
　アカリは、なんとかしようと二人の間に入って止めようとしている。
　そんなぐだぐだ感のままシャングリラの入り口に到着した。
「ここがシャングリラへの入り口だよ」
「はぁ、はぁ。やっと着いたか……」
「はぁ、はぁ。あんたのせいよ……」
　なぜかダイゴとユイだけがかなり疲弊していた。
「もう、余計な事するからだよ」
　道中、言い合いしていた二人だが、ダイゴの「どちらが多くモンスターを倒して先に到着するか勝負しろ！」という言葉に最初ユイは受け流したものの、「負けるのが怖いのか？」というダイゴの挑発にムキになった結果がこうなった。しかも勝負の結果は引き分けで不毛な争いというオチで終わった。

「少し、休憩頂戴……」
「こればかりはユイに同意だ……」
「……大変だねキミも」
　リューシンの同情をこめた眼差しにユウキはただただ、苦笑するしかなかった。
　二人の体力がある程度回復した頃、シャオとミンメイがユウキ達のもとに到着した。
「お待たせしました。皆さんの実力ならもう玄武洞を見つけてると思っていましたが……」
「まぁ、ちょっと問題がありまして」
　ユウキが後ろで少し申し訳なさそうにしているユイとダイゴを見る。それでシャオも察したのか「そうですか」とだけ言い、深くは詮索しなかった。
「ミンメイ、キミも来たのかい？」
「うん。皆にお願いしたけど、ミンメイだけ街で待ってるのは嫌だったの。ミンメイも頑張らないとって思って、シャオおねーちゃんにお願いしたの」
「そっか、じゃあ俺もみんなと一緒に玄武洞まで行きますよ。良いですよねシャオさん」
「分かりました。では、私はこの二人の護衛をします。先頭はお願いいただけますか？」
「もちろんです。じゃあ、行きましょうか」
　こうしてユウキ達はシャングリラへと足を踏み入れた。

　シャングリラ内部は荒地の多いアルカディアとは違い、緑の生い茂る高地が続いていた。
「モンスターが強く罠も多いので気をつけていきましょう」
「罠も多いか……」
　ユイはその言葉を聞いて無言でダイゴの後ろに回る。
「なるほど」
　ユウキも同じようにダイゴの後ろへ。
「な、なんだよ。お前等」
「ごめんね。ダイゴお兄ちゃん」
　アカリも申し訳なさそうにしながら後ろ行く。そしてダイゴがパーティーの先頭に立つ形になった。
「それじゃあ、気を取り直していこっか！」
『おーっ！』
「あ、おい……。まぁいいか」
　何か言いたそうだったダイゴだが、押し切られる形で言うのをやめて先頭を歩き始めた。
「よくこの人達一緒にいられるよね」
「……そうね。私も少し思っていたわ」
「俺もさっきアルカディアでのやりとりをみて思いましたよ」
　そんな四人をシャオ達三人が少し呆れ顔で見ていた。
「お、早速モンスターだぜ」
　目の前には桃の形に似たモンスターに白い虎のモンスター。おまけに冠をかぶった蛙のモンスターと多数いる。
「いきなり豪華なお出迎えね！」
「みんな気をつけて！」
「俺がいる限り皆には近づけさせないぜ！」
「ダイゴお兄ちゃん、無理はしないでね！」
　全員が武器を構え、戦闘態勢に入る。
「あいつらは……」
「ミンメイ知ってるよ。桃みたいなのが、マウスピーチ。白い虎はホワイトタイガーで蛙はフロッグ王子。ミンメイが退治して欲しいってお願いしたモンスター達だよ！」
「……ダイゴいける？」
「任せろ！　この程度ちょろいぜ！　うっし、いくぜぇ！」
　ダイゴは盾を構えモンスター達に突撃する。
「行くよ！」
　ユウキもダイゴの後に続いてモンスター達に突撃する。
「おらおら！　Wブレイク！」
　攻撃を受けつつも、持ち前の体力で怯まずガンガン攻撃するダイゴ。

「やるね！　僕だって……乾坤一擲！」
「私もやるよぉ！　サンダートラップ！」
「あんたらなんかには負けてられないわ。ヘイルストーン！」
　ダイゴに負けじとモンスター達を蹴散らしていく三人。
「っと、ユイ危ないよ。メテオウェーブ！」
　ユウキがユイに近づいていたモンスターに気付いてなぎ払う。
「あ、ありがと……はっ！　そ、そんな事気付いてたんだから！　べ、別にあなたの助けなんかいらないわ！」
「全く……素直じゃないなぁ」
「ダイゴお兄ちゃん後ろ！」
「なに！？」
「マシンガン！」
　アカリのカバンから射出された弾がダイゴの後ろにいたモンスターを撃ちぬく。
「助かったぜアカリちゃん！」
「うん！　任せてよ♪」
「やりますね……」
　見込んだとおり実力はあったが、お互いが助け合いなが戦っている。そのチームワークの良さにシャオは関心していた。
「戦闘時に関してはこの四人。かなりのものなんですよね」
「ミンメイもびっくりした。いつもケンカしてるけどここまで一緒になって戦えるなんて」
「シャオさん！　危ない！」
　三人が会話をしているとユウキからの声がかかる。
「……！」
　シャオ達の近くにホワイトタイガーがいた。しかもシャオ達を狙っている。
「俺とした事が！　くそっ、どけ！」
「最後の最後でやってくれるわね！」
　ダイゴ達が救援に向かおうにも数少ないモンスター達の最後の抵抗に阻まれ行く事が出来ない。
「ウガァァァ！」
　ホワイトタイガーがシャオ達目掛けて跳躍する。
「シャオおねーちゃん！」
「ここは俺が行きます！」
「いえ、私に任せて……」
　シャオは持っていた二胡を居合い時の鞘のように構える。
「……一閃！」
　そして、その二胡から刀が引き抜かれ、飛んできたホワイトタイガーを弾き飛ばした。
「すごい……」

　モンスター達を全て倒し、駆けつけたユウキ達はその場で立ち止まり唖然としてみていた。シャオは刀を再び二胡へと納める。
「剣術の心得が少しあると言ってましたが、そんなレベルではないですね」
「ふふ、それほどでもありませんよ。さぁ、先に進みましょう」
　シャオは軽く微笑んだ後、何事もなかったように歩き出した。
「すげぇなぁ、シャオさん」
「でしょ？　シャオおねーちゃんすごいんだから！」
「シャオさんは龍京の剣聖の後継者ですからね。そこら辺の冒険者より全然強いですよ」
「それはすごい……。よし。では、気を取り直していきましょうか」
　ユウキ達も歩みを再会した。
「よっしゃ！　この調子でがんがん行くぜ！」
「ダイゴ前！」
「ん？　うぉ！」
　そして、いきなり足元から突き出てきた木の槍の罠を寸前で回避するダイゴ。
「ふぃ～。危なかったぜ」
「みんな気をつけてね」
　ダイゴ本人は気付いてないが、ダイゴを罠避けの道具に使っているほかのメンバー。
「ダイゴおにーちゃんは気付いてないのかな？」
「多分気付いてないのでしょうね」
「可愛そうに……」
　罠避けに使われている事に気付かないダイゴに憐れみの視線を向ける龍京メンバー。
「お、またモンスターか」
　目の前には可愛らしい女の子のモンスター――ただし下半身はヤドカリという姿。
「あれはヤドカリ姫ですね」
　リューシンはこの辺りのモンスターに詳しいのか色々と教えてくれる。
「はははっ！　相手が誰だろうと容赦しないぜ！」
　ダイゴは盾と片手剣を構え突撃する。
「～♪」
　その間にヤドカリ姫は何かを歌っている。
「あれは……」
「……？」
　リューシンの呟きにユウキは首を傾げる。
「ブレイク！　Wブレイク！　そしてトドメのソニックブレイド！」
　ユウキは気になったものの、一人突撃したダイゴが怒涛の勢いで攻撃を始めたのでそちらに意識がそれる。そして、ダイゴの攻撃を受けたヤドカリ姫は目を回して倒れた。
「可愛いだろうがなんだろうがモンスターなら俺は容赦しないぜ！　うおぉぉぉぉぉ！」
　一人吠えるダイゴ。そんなダイゴをユイは冷ややかな目で見ていた。
「どうしてかしら。モンスターだし、確かに悪い事ではないんだろうけど、あいつのほうが悪者

のように見えるのだけど」
「それは私も思った……」
「ミンメイも」
「失礼ですが、私も少し……」
「俺もですよ」
「言ってる事がなぁ……」
「どうした？　ほらさっさと行こうぜ」
　非難の視線を受けているとは気付かずダイゴが先を促す。そして、みんなが前を歩き出すのに対してダイゴだけはなぜか後ろへと歩いていく――前を向きながら。
「ダイゴ、なんであんたバックしてるのよ？」
「い、いや。俺自身どうしてか……」
「やっぱりか」
　リューシンは一人納得したように頷くが他のメンバーは何の事だか分からず首を傾げている。
「リューシン。何がやっぱりなのですか？」
「あ、シャオさん。えっと、これはヤドカリ姫の攻撃の一つでして、あいつの歌を聞くと方向感覚がおかしくなるんですよ」
「それで前を向いているのに後ろに向かって歩いているのですか？」
「そういうことです」
「うぉー！　前に進めねぇ！」
　一人どんどん後ろに歩いていくダイゴ。
「時間が経てば治るのであまり歩くのは……あ」
「ダイゴストップ！」
「は？」
　時既に遅し。すでにダイゴの足元には足場がなかった。
「へ？　うおおぉぉぉぉ！！　俺に構わず先にいけー！！」
　そして、そのまま良く分からない台詞を残して落下していった。
「あ～あ。落ちちゃったわね」
　ダイゴの一大事なのにも関わらず軽い口調のユイ。
「ユイお姉ちゃん！　そんな言い方ないよ！　ダイゴお兄ちゃん落ちちゃったんだよ！？」
　それは聞き捨てならないとアカリが怒りながらユイに言うがそれでも涼しい顔をしている。
「でも、あいつにしたらいつもの事じゃない」
「それは……そう、だけど」
　本当にいつもの事なのか、ユイの言葉に逆に反論できずしり込みしていくアカリ。
「さぁ、行きましょう」
「ダイゴおにーちゃん置いてくの？」
「大丈夫だよ。ダイゴはいつも罠とか崖とかから落ちたりするけど、いつも元気に戻ってくるから。先に玄武洞の入り口まで行って待ってようよ。それにダイゴも言ってたしね」
「ユウキお兄ちゃんがそういうなら……」

　未だに不満そうなアカリだったがユウキの言葉に渋々従った。落ちたダイゴをそのままにし、先へ進むユウキ達。
「全く酷い目にあったぜ……」
「あ、ダイゴ早かったね」
「あまり高い場所じゃなかったからな。ひょいひょいっとな」
　結局、あっという間に合流したダイゴであった。

「……また出たな」
　ある程度進んだところで先頭のダイゴが立ち止まる。目の前にはヤドカリ姫。
「もうあんな巧妙なトラップは効かないぜ！」
「あれ、トラップだったかしら？」
「あははは……」
「うおぉぉぉ！　いくぜぇ！」
　剣と盾を構えて突撃。
「～♪」
　その間にヤドカリ姫は再び歌を歌う。
「遅いぜぇ！　竹斬り！　ドラゴンテール！　ライジングクラッシュ！！」
　容赦なしのスキル連撃。ヤドカリ姫に耐えられるわけもなくその場に倒れた。
「はっはっはっはっは！　甘いぜ！　鍛えて出直してくるんだな！」
　一人高笑い。そして、呆れる六人。
「……まぁ、良いわ。いきましょ――あら？」
　ユイが前に歩こうとするがなぜか後ろに歩き始める。
「どうやら僕らにも効果が出たみたいだね。どうする？」
「どうするも何も、簡単な事よ」
　ユイは進行方向である方を背にしてそのまま歩き出す。
「このように行きたい方向に背を向けて歩けば良いのよ。よっと」
　ユイはそのまま歩きだし、その先にあった崖を背を向けたまま飛び越える。
「ほら、あんた達も来なさい」
「シャオさん達お先にどうぞ。何かあったときはユイと僕で助けますので」
「分かりました。ミンメイ、リューシン行きますよ」
「はーい」
「了解です」
　シャオ達三人もぎこちなくではあるが無事崖を越える。
「アカリちゃん。どうぞ」
「うん！」
　その三人の後にアカリが続く。
「ダイゴー、行くよー」
「あははは！　よく考えれば、こりゃ、面白いぜ！」
　ダイゴはその逆向き歩きで一人遊んでいた。
「全く……、僕は先に飛ぶよ？」
「あれ、いつの間に……。あ、待てよユウキー」
　ユウキが飛び越え、ダイゴが飛んだ瞬間にそれは起きた。
「……へ？」

　途中まで背を向けた方に飛んでいたはずなのに途中で進行方向が向いてる方向に。
『……あ』
　見ていた皆が同時に声を上げた。
「ちくしょぉぉぉぉぉぉ！！　またかよーーー！！」
　そして、届かなかったダイゴは穴へと落ちていった。
「ダイゴおにーちゃん、また落ちちゃった……」
「相当運のないお方ですね……」
「飛んでる途中でヤドカリ姫の歌の効果が切れたみたいですね」
「それで途中で飛んだ方向が前に？」
「そういうことです」
「そう。さぁ、行きましょう」
　ユイの言葉に促されみんな歩き始める。先程のダイゴを見て心配する必要がないと悟ったようだ。
　――しかし、今回の穴は結構深かったのか、ダイゴが合流したのはみんなが玄武洞に着いた時で、ダイゴ自身ずたぼろであったのだった。

激突、シェンウ！　ダイゴにある願望

「準備はよろしいですか？」
　シャオの言葉に頷く。色々ハプニング（主にダイゴだけ）があったものの何事もなく玄武洞に到着した七人。
「行きます」
　シャオに続いて中に入ると、そこには宝の山があり、その奥には一際大きい亀がいた。みんな岩陰に隠れ様子を見る。
「あれがシェンウ……玄武です」
　まだ向こうはこちらに気付いていないようでお宝の方を見ながらのほほんとしている。
「先手必勝だぜ！」
　ダイゴは岩陰から飛び出し、単身で玄武へ走り出した。
「あっ！　ダイゴ！　シャオさんはリューシンさんとミンメイちゃんの援護を！　玄武は任せてください」
「全く！　世話のかかるやつね！」
「皆さんもお気をつけて！」
　ユウキ達もダイゴに続き岩陰から飛び出す。それに気付いた玄武はすぐさま攻撃態勢に入る。
「うらぁぁぁ！！」
　ダイゴは片手剣を振り上げる。そこに玄武はその大きすぎる体をいかして突撃してきた。
「ぐはぁっ！」
　玄武の大きさに勝てるわけもなく吹っ飛ばされるダイゴ。
「もう、なにやってるのよ！　ウンディーネヒール！」
　ユイがダイゴに回復スキルを使うがほとんど回復されない。
「……もう少し回復量が欲しいぜ……」
　突っ伏したダイゴがポツリと呟いた。しかしそれがまずかった。
「う、うるさいっ！　アイススピアー！」
「ぐはぁぁ！」
　怒ったユイがダイゴに追い討ちとばかりにスキルをぶつける。
「悪かったわね！　どうせ回復スキルは苦手ですよーだっ！」
　攻撃スキルはピカイチなユイ。だが、回復スキル系に関しては残念な能力しか発揮でないのである。
「くっ、強い！　ユイ！　手伝って！」
　その間もユウキとアカリは玄武を相手に奮闘していた。接近しようとすればブレスをされ、距離を置けば突進を喰らう。それらをかいくぐり、少しずつダメージを与えていく。
「今行くわ！　ダイゴ、あんたは今のうちに回復しておきなさい！」
「おーう……」
　突っ伏して手だけを振るダイゴを置いてユイも加勢する。
　後衛攻撃であるユイが加わり、ユウキが玄武をひきつける。アカリがヒットアンドアウェイ。

ユイは安全な位置から魔法で攻撃という陣形が出来上がり、確実に玄武へとダメージを与える。
「はぁ、はぁ……。しぶとい」
　しかし、これはかく乱するユウキと前後に動くアカリにとってかなりの負担となる。しばらくの間その戦法で攻めたものの、玄武はまだ倒れてくれない。
「私も、そろそろ限界かも……」
　ユイもあまり動きはしないものの、魔法を使う事に集中力を使うため疲労はかなりのものになっていた。
「ユウキお兄ちゃん……私もうだめぇ～……」
　とうとう限界が来たのか、アカリは座り込んでしまった。もちろん玄武もそれを見逃すわけがない。
「アカリちゃん！」
　玄武も限界に近いのか、動きは遅い。しかし、ユウキ達もすぐに動けるほど体力は残っていない。
「ぁ……」
　玄武は押しつぶそうとアカリへと迫る。
「任せろぃ！」
　しかし、そこに出てきたのは今まで突っ伏していたダイゴ。
「俺が！　玄武を！　倒す！　渾身のライジングクラッシュ！！」
　ダイゴの放った渾身の一撃は玄武を見事に打ち倒した。倒れゆく玄武。
「うっしゃぁぁぁぁ！！」
　一人ガッツポーズ。
「あのバカダイゴ、良いところだけ持って行ったわね」
「皆さん！　ご無事ですか！」
　玄武が倒れたのを見て岩陰にいたシャオ達が出てきた。
「あ、はい」
「私が出ようとしたのですが、ダイゴさんに止められて……」
「気にしないで良いわよ。あいつはそんな奴だから」
　みんながダイゴに視線を向ける。しかし、その先にあったはずの玄武の姿がない。
「あれ……玄武の姿がないよ？」
「まさか……」
「くっくっくっく……」
　ダイゴから不気味な笑い声が聞こえてくる。
「ダイゴ？　あんた、とうとう頭が壊れたのかしら？」
「あーはっはっは！　これは全部俺のものだぁ！」
　宝のほうに向かって叫ぶダイゴ。
「いけない……！　玄武の邪悪な力に乗っ取られている！」
「そして、世界一のモテ男になって散々馬鹿にしてきたユイの奴を見返してやる！　最終的には

ユイに『ダイゴ様今まで申し訳ありませんでした』って言わせてやるんだぜぇ！！」
「……あいつ殺して良いかしら？」
「あはは……」
「む、剣聖の娘！　こんなところで邪魔はさせん！」
　そして、乗っ取られたダイゴがこちらに気付き剣と盾を構える。特にシャオの事を警戒しているようだ。
「……止めれば良いのかしら？」
「はい、そうなりますね」
　シャオが二胡を構える。
「良いわね。徹底的にやってあげる！」
「ダイゴ悪いけど手加減なしでいくよ！」
「ごめんね。ダイゴお兄ちゃん」
「いくぞ！」
「ヘイルストーン！」
「超電子ブレイク！」
「メカサモン！」
　三人による遠慮なしの総攻撃。
「な――！　ぐあぁぁぁぁぁ！！」
　さすがのダイゴでも耐えられるはずもなく吹っ飛ぶ。
「まだまだよ！　アイススピアー！」
「ぐはぁ！」
「あらあら、あんたってその程度？　バブルバブル！」
「のはぁ！」
「さっきの威勢の良い態度はどこにいったのかしら！？　ヘイルストーン！」
「ぐばはぁぁ！！」
「凍らせてあげる！　アイスストーム！」
「っ――」
　オーバーキル並のユイの魔法連弾。そしてトドメにダイゴを氷漬けに。
「ユイおねーちゃん。容赦ないね……」
「ああいう子だけは敵にしたくないものです……」
　みんなちょっと引いていた。
「さぁ、せっかくだからシャオもやっちゃいなさい」
「え、しかし……」
　さすがにかわいそうなのか躊躇するシャオ。
「このまま氷漬けにしておくならやらなくても良いわ。盛大にやっちゃいなさいよ」
「……ごめんなさい！　一閃！」
　シャオは謝りつつもトドメの一撃を浴びせた。
「ぐおわはぁぁぁぁ！！！」

　氷は砕け綺麗に吹っ飛ぶダイゴ。
「さーて、バカダイゴ。まだまだ私の怒りは収まりきってないわ。地獄を見せてあげる……」
　先程のダイゴの台詞がよほど気に食わないのか、殺気を放ちつつゆっくりとダイゴに近づくユイ。
「おっと、お嬢さん。そこまでだ」
　ユイとダイゴの間に男が一人割り込んできた。
「あなたは誰かしら？」
「あなたはカズノ！」
　シャオが驚きの声を上げる。
「カズノさんって、あのエリアス決闘場を完全制覇したというカズノ・ナスさん？」
「そう、俺がそのカズノだ」
「イリス一行のメンバーとしてエリアス王宮の危機を救ったと」
「そう、俺がそのカズノだ」
「……自分をイイ男と称し、行く先々で女性という女性に声をかけたという……」
「そう、俺がそのカズノだ」
「……アホ」
「バカね……」
　最後の質問の答えに呆れるシャオとユイ。
「まさか、玄武の力に見せられた奴を殺しかけるとはな」
「ん……、おろ？　俺は何をしてたんだ？」
　その間にダイゴが目お覚まし起き上がる。
「大丈夫よ。殺しはしないわ。ねぇ、バカダイゴ」
「ん？　お、おぉ。そうだな……？」
　ユイの言葉に何が分からないと首を傾げるダイゴ。
「それよりも、イリスと共に魔王を倒したメンバーの一人であるカズノさんに質問が……」
「共に……か。さぁな。それは事実のようで事実とは反する。そんな言葉だ」
「うみゅ？　どういうことユウキお兄ちゃん？」
「倒したのは本当だけれど、本当の事じゃないってところかな……？」
「お前達は伝説のイリス一行、それは魔王を打ち破った英雄、彼女を助けた仲間達。そんな世間の噂話を信じてしまってもいいのか？」
「どういうことよ？」
「俺はイリスを助け、イリスを滅ぼした男だ」
「えっ？」
　自虐的に言うカズノに全員がびっくりするが、それは一瞬の事で気付いた時にはカズノは元に戻っていた。
「そうだな……。アオイチの黒月城。そこの姫さん、黒月姫に会ってみることだ。お前達が思っている事とは全く違う話をしてくれるだろう」
「アオイチの黒月城……」

「ユウキお兄ちゃん！　良かったね。これでまだ旅が出来るよ！」
「うん、そうだね」
　隣で喜ぶアカリの頭を撫でるユウキ。
「この羅針盤をやろう。それを持ってまず、アオイチの武士ハヤトに会うと良い」
　カズノは羅針盤をユウキの手においてそのまま何処かに行こうとする。
「えっ？　カズノさん！　何処へ」
「さらばだ。イイ男は消えるときも唐突なのだよ」
　そして、爽快に去っていった。
「なんだったんだあいつ？」
「知らないわよ。とにかく、これで無事に終わった事だし、一度龍京に戻りましょう」
「そうですね。行きましょう」
　全員は玄武洞を後にした。

新たなる地へ……

「もう行ってしまうのですか？」
　龍京に戻った四人はすぐさまアオイチへと向かうためすでに旅支度を終え、街の出口まで来ていた。そしてシャオ、リューシン、ミンメイの三人が見送りに来ていた。
「はい、カズノさんの言葉が気になりますから」
「そうね。私ももっと詳しく知りたくなったわ」
「そうですか。ちゃんとしたお礼がしたかったのですが……」
「いえいえ、お構いなく」
「俺からもお礼を言われてください。ありがとう」
「そんなっ、私達は当然の事をしただけだよ」
「ミンメイのお願いも聞いてくれてありがとう。おにーちゃん達」
「おうよ！　また何かあったら頼んでくれよ！」
「それではまた会いましょう。みんな、行くよ」
　こうして、ドタバタしながらも見事玄武を打ち倒したユウキ達は新たな道を示してくれたカズノの言葉通り、アオイチへと旅立ったのだった。
「よっしゃ！　地図は任せろ！」
「誰がアンタなんかに任せるのよ！」
「まぁまぁ、落ち着いて」
「そうだよユイお姉ちゃん！」
　ドタバタ道中記はまだまだ続く……。